

I 2017年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2017年度大学評価結果総評】

能楽研究所の研究・教育活動は、実績として十分な研究成果があり、活発な研究活動が継続的になされていることは特筆に値する。また、日本芸術文化振興会からの感謝状の贈呈、研究所の学際的研究が新聞に掲載され、学術論文の引用数も多く社会・学術両面から高い評価を受けていることも優れた成果である。

一方、外部評価結果として、「特色ある共同拠点の整備の推進事業」がA評価を受けたことは、優れた研究活動が客観的にも認識されていることを示しており、これまでの研究所の活動に敬意を表したい。外部資金も科研費基盤Bに2件採択されるなど申し分ない。

質保証活動も運営委員会を月1回開催しており、適切に運営されている。能楽研究所の国内外の研究拠点としてのさらなる躍進に期待したい。

【2017年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400字程度まで）

大学評価委員会から十分な評価とあたたかい励ましの言葉を得た。学内他部局と組もうとする際にはこの評価が一種の保証書のようになり、以前よりスムーズに新しい協力関係が作りやすくなっている。一方、文科省の「特色ある共同研究拠点の整備推進事業 機能強化支援」への申請は残念ながら不採択となった。中間評価でA評価を得たことも、「S評価には至っていない」ともう少し謙虚に受け止めるべきだったかと反省している。地道な学術・研究活動とその成果の学界・社会への還元こそが最も重要と考えているが、外部からの評価を上げるためには「能楽研究」の範囲自体を広げる必要があるため、大学内外の異分野の研究者との協同プロジェクト、より緊密な国際的なネットワークの構築等にも励みたい。

【2017年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

能楽研究所では、学術・研究活動とその成果の学会・社会への還元が最も重要と謳っているように、2017年度は前年度と比べ、セミナー、シンポジウム等の開催回数が増加し、対外的に発表した研究成果も多く、研究活動が活発化している点が高く評価できる。研究成果が広く引用されている点も、研究成果の波及効果が高いことを示している。学外との研究協力体制についても、立命館大学アート・リサーチセンターと包括学術協定が結ばれたことは大きな進展であった。しかし、国際的なネットワーク構築については具体的な進展がないため、引き続き検討いただきたい。

II 自己点検・評価

1 理念・目的

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、研究所（センター）の目的を適切に設定しているか。

① 研究所（センター）として目指すべき方向性等を明らかにした理念・目的が設定されていますか。 はい いいえ

（～400字程度まで）※理念・目的の概要を記入。

中世に生まれた日本最古の演劇である能楽（能・狂言）の、歴史的変遷を調査・研究するとともに、現代に生きる演劇としての魅力や芸術性を解明し、能楽研究の発展と能楽の振興を目指すこと。

② 理念・目的の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。

（～400字程度まで）※検証を行う組織（各種委員会等）や検証の時期等、具体的な検証プロセスを記入。

理念・目的は頻繁に変更を要するようなものではないと認識しているが、

- a. 学内の運営委員で構成されている運営委員会の定例会議で、研究所の活動の適切性について検証を行う際に、その基準となる理念・目的自体の適切性も再確認している。
- b. 「能楽の国際・学際的研究拠点」としての活動はより学際的に広がっていくが、新しい研究活動が、上記の理念・目的をあまりに大きく超えて無理を生じていないか、常に、専任・兼任・兼任所員の間で議論・検討している。
- c. 研究拠点の運営委員会（外部の有識者を含めた12名から成る）において、年度初めと年度末の二回、研究所の年間の活動予定・活動成果についての総括と検証を、上記の理念に基づいておこなっている。

1.2 大学の理念・目的及び研究所（センター）の目的を教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。

① どのように理念・目的を教職員及び学生に周知し、社会に対して公表していますか。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(～400字程度まで) ※具体的な周知・公表方法を記入。

能楽研究所のパンフレット、およびウェブサイト(以下のURL)上で公表されている。

<https://nohken.ws.hosei.ac.jp/about/greeting.html>

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

能楽研究所の理念・目的は明確に設定されており、その適切性に関しては運営委員会の年度初めと年度末の二回の会議で再確認されている。その際、新たな研究活動が理念・目的と大きく乖離していないかを議論・検討している点は評価できる。理念・目的はパンフレットとウェブサイトにより適切に公表されている。

2 内部質保証

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 内部質保証システム(質保証委員会等)を適切に機能させているか。

① 質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。 はい いいえ

【2017年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】 ※箇条書きで記入。

1) 能楽研究所運営委員会

構成員

山中玲子 法政大学能楽研究所所長
宮本圭造 法政大学能楽研究所教授
星野 勉 法政大学文学部教授
阿部真弓 法政大学文学部教授
伊海孝充 法政大学文学部教授
鈴木 靖 法政大学国際文化学部教授
竹内晶子 法政大学国際文化学部教授
岩月正見 法政大学デザイン工学部教授
高村雅彦 法政大学デザイン工学部教授

活動概要

原則として月一回、運営委員会を開き、研究所の活動の検証を行っている。2017年度は4月、7月、9月、11月、12月、1月、2月、3月(2回)に実施。

2) 文科省認定の「能楽の国際・学際的研究拠点」の運営委員会

構成員

尾川浩一 学術支援本部担当常務理事
山中玲子 法政大学能楽研究所所長
宮本圭造 法政大学能楽研究所教授
スティーヴン・ネルソン 法政大学文学部教授
竹内晶子 法政大学国際文化学部教授
坂上 学 法政大学経営学部教授
稲田秀雄 山口県立大学国際文化学部教授
大谷節子 成城大学文芸学部教授
観世喜正 観世流能楽シテ方、能楽協会理事
佐藤禎一 元ユネスコ日本政府代表部大使、東京国立博物館名誉館長

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

竹本幹夫 早稲田大学文学学術院教授
マイケル・ワトソン 明治学院大学国際学部教授

活動概要

原則として年に一、二回、専門委員会を開き、研究拠点としての活動の検証を行っている。2017年度は2017年6月と2018年3月に実施。

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

能楽研究所の質保証は、原則月1回の運営委員会と年2回の専門委員会により、研究所・研究拠点としての活動の検証を行っている。

3 研究活動

【2018年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2017年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2017年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

研究所の資料や予算、人的資源等を用いておこなったセミナー、シンポジウム、研究会、展示等を開催日順に掲げる。ゴシック太字にしたものは、一般公開の催しとして広報を行ったもの。場所は特記したもの以外はすべてBT会議室。

- 1) 間狂言研究会（クローズ） 於能楽研究所会議室 8月3日（参加者7名）
- 2) 間狂言研究会（クローズ） 於能楽研究所会議室 9月11日（参加者13名）
- 3) 研究会「中世「能の語り」の汎用性とキリシタン版『太平記抜書』語り復元—『太平記抜書』「阿新丸の段」と能「壇風」—」 能楽学会との共催 9月29日（参加者37名）
- 4) 法政大学能楽研究所公開セミナー／法政大学大学院国際日本学インスティテュート合同演習「狂言の笑い 一昔と今一」 於スカイホール 10月7日（参加者：第一部76名、第二部85名）
- 5) 研究会「作品研究〈柏崎〉一世阿弥自筆本と元頼本に描かれた家族像」 能楽学会との共催 10月16日（参加者14名）
- 6) シンポジウム「能楽のウェブ発信とその未来—デジタル資料アーカイブから新たなコンテンツ制作の試みまで—」 於スカイホール 10月22日（参加者12名〔大型台風直撃のため少数〕）
- 7) 領域開拓プログラム「テクノロジーの革新と日本の美学および感性」研究会（クローズ） 10月28日（参加者7名）
- 8) 日本伝統芸能研究コンソーシアム設立に向けての会議（クローズ） 11月24日（参加者9名）
- 9) 〈能と仏教〉公開研究会 12月1日（参加者20名）
- 10) 〈能と仏教〉公開研究会 12月8日（参加者13名）
- 11) 研究会「能〈唐船〉と祖慶官人の背景について」 能楽学会との共催 12月20日（参加者21名）
- 12) 間狂言研究会（クローズ） 於能楽研究所会議室 12月25日（参加者10名）
- 13) 資料展示「能付資料の世界—技芸伝承の軌跡をたどる—」 於BT博物館展示室
2018年2月20日～3月24日（観覧者158名〔展示室設置の芳名帳記載分〕）
ギャラリートーク 2月28日

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- 14) ワークショップ「型付だけで舞えますか」 ①2018年2月28日 ②3月12日 (参加者: ①25名・②32名)
- 15) 領域開拓プログラム「テクノロジーの革新と日本の美学および感性」研究会 (クローズ)
於能楽研究所会議室 2018年3月2日 (参加者6名)
- 16) 領域開拓プログラム「テクノロジーの革新と日本の美学および感性」研究会 (クローズ)
於能楽研究所会議室 2018年3月5日 (参加者7名)
- 17) 間狂言研究会 (クローズ) 於能楽研究所会議室 2018年3月8日 (参加者11名)
- 18) 第20回能楽セミナー「シンポジウム 以心伝心・以身伝身—「ワザを伝えるワザ」とは何か?—」於スカイホール 2018年3月12日 (参加者150名)
- 19) <能と仏教> 公開研究会 2018年3月20日 (参加者13名)

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・野上記念法政大学能楽研究所 JOURNAL Vol.7

②対外的に発表した研究成果 (出版物、学会発表等)

※2017年度に刊行した出版物 (発刊日、タイトル、著者、内容等) や実施した学会発表等 (学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等) の詳細を箇条書きで記入。

* 研究所としての刊行物

- ・『能楽研究』42号 (専任所員の論考1本、兼担所員の論考2本、外部の寄稿論考2本などを収録) 2018年3月刊

* 専任所員の研究成果

山中玲子「源氏物語と能楽研究」(『能と狂言』15号)

「Fraternizing with the Spirits in the Noh Plays Saigyō-zakura and Yamamba *Rethinking Nature in Japan* (Ca' Foscari Japanese Studies)

「〈二人静〉—音阿弥の演出・元章の解釈—」(『観世』85巻3号)

「〈通盛〉前場のシテ・ツレ・登場段をめぐって」(『能楽研究』42号)

(学会発表)

「How is a Noh professional trained?」(the 15th International Conference of the EAJS, *The world of Noh: three aspects of its socioeconomic structure*)

宮本圭造「金春家本面の復元」(『能と狂言』15号)

「大和猿楽の成立と展開—古代から中世へ—」(奈良県立万葉文化館『日本文化の源流』)

「狂言台本研究の現状と課題」(『武蔵野文学』65号)

(学会発表)

「For whom is noh staged? Training for the actors of performance for the audience?」(the 15th International Conference of the EAJS, *The world of Noh: three aspects of its socioeconomic structure*)

「「歩行」に始まり「歩行」に終わる—比較演劇的観点から見た日本の伝統演劇の特質—」(ストラスブール大学国際研究集会, Corps et Message)

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

③研究成果に対する社会的評価 (書評・論文等)

※研究所のこれまでに発行した刊行物に対して2017年度に書かれた書評 (刊行物名、件数等) や2017年度に引用された論文 (論文タイトル、件数等) の詳細を箇条書きで記入。

- ・能楽研究において最も権威ある学会誌『能と狂言』15号所載の論文2本に、専任所員2名の論文がそれぞれ引用されているほか、専任所員1名が執筆する共著2冊の書籍紹介も同誌に掲載されている。
- ・『金春月報』に専任所員1名が監修・解説を行った能楽研究所の企画展示「能付資料の世界」についての詳しい紹介が掲載されている。
- ・日本芸能史研究において最も権威ある学会誌『藝能史研究』219号所載の論文1本に専任所員1名の論文1本が引用されている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- ・思文閣出版から刊行された書籍『能管の演奏技法と伝承』に専任所員1名の論文1本が複数回にわたって引用されている。
- ・国立能楽堂展示図録『野崎家能楽コレクション』に専任所員1名の論文1本が、MIHO MUSEUM 特別展図録『猿楽と面』に専任所員1名の論文2本が引用されている。
- ・2017年度の刊行物ではないが、2018年度にコーネル大学から出版される書籍『Cultural Imprints of Japan's Samurai Age』に専任所員1名の論文2本が引用されているほか、2016年度にイタリアのヴェネツィア・カフォスカリ大学から刊行された書籍『Scenari del teatro giapponese』に、専任所員2名それぞれの著書2冊が参考文献として挙げられている。
- ・紀要等では、『能楽研究』42号所載の論文1本に専任所員1名の論文が、文化庁補助金報告書『篠原おどり解説書』所載の論文に専任所員1名の論文3本が複数回にわたって引用されているほか、立命館大学大学院紀要『Core Ethics』14号に所載の論文1本に、2016年度に能楽研究所が刊行した書籍『近代日本と能楽』所載の論文3本が複数回にわたって言及されている。また、金沢大学国際文化資源学センターから発行された『古典演劇研究の対象と視点』にも、同じく『近代日本と能楽』所載の専任所員が執筆した論文1本が引用されている。2017年度に刊行された全ての書籍・論文を検索したわけではなく、引用の総件数を具体的に挙げることはできないが、以上の例から、参照すべき業績として国内外の学界で高く評価されていると言える。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

（～400字程度まで）※2017年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

定期的な外部評価は受けていないが、文科省の共同利用・共同研究拠点として、学内外の構成員から成る運営委員会の細かなチェックを毎年受けている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2017年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および2017年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を簡条書きで記入。

*2017年度中に応募した科研費等外部資金

- ・学術研究振興資金「能楽の国際参照標準確立と多面的展開に向けての総合研究」（採択。90万円＋学内予算195.5万円）（2018年度分）

*2017年度中に採択を受けた科研費等外部資金

- ・学術研究振興資金「能楽の国際参照標準確立と多面的展開に向けての総合研究」（100万円＋学内予算220.5万円）
- ・科学研究費補助金基盤（B）「能楽及び能楽研究の国際的定位置と新たな参照標準確立のための基盤研究」（研究代表者：山中玲子、2017年度直接経費290万円）
- ・科学研究費補助金基盤（B）「能楽資料データベース構築に向けた金春家文書の総合的研究」（研究代表者：宮本圭造、2017年度直接経費152万円）

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

能楽研究所の研究・教育活動に関しては、19回のセミナー、シンポジウム等が開催されている。開催数は前年度に比べて大幅に増加しており、精力的な研究活動が行われていることは特筆すべきである。その中で5件の一般公開の催しを実施し、能楽研究の啓蒙活動を行っている点も評価できる。対外的に発表した研究成果も多く、活発な研究活動が継続されている。外部組織からの論文引用が多く、研究の波及効果の高いことが伺える。

外部組織からの評価は受けていないものの、文科省の共同利用・共同研究拠点として学内外からの運営委員から評価を受けている。第三者評価についても、検討を期待したい。科研費に関しては複数課題で採択されており、研究成果の社会への還元が期待できる。

4 教育研究等環境

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 教育研究を支援する環境や条件を適切に整備し、教育研究活動の促進を図っているか。

①ティーチング・アシスタント (TA)、リサーチ・アシスタント (RA)、技術スタッフなどの教育研究支援体制はどのようになっていますか。

S A B

(~400字程度まで) ※教育研究支援体制の概要を記入。

リサーチ・アシスタント (RA) 1名がおり、資料調査等の日常的な研究活動の他、シンポジウム、資料展示等の企画、広報に関しても重要な役割を担っている。

ウェブサイトでの情報発信に関しては、理工学部の八名和夫教授のゼミ学生をアルバイトで雇い、サポートを受けているほか、情報メディア教育研究センターとも協力関係を結んでいる。

【2017年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2017年度より、情報メディア教育研究センターと正式に協同プロジェクトを開始した。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・野上記念法政大学能楽研究所 JOURNAL Vol.7

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
情報メディア教育研究センターとの協同プロジェクトは学内の理工系研究所と協力しておこなう初めての試みである。従来は、個人的な繋がりや厚意を頼って IT に関する知識や助力を得ていたが、両機関の知見を共有し双方にとって益のあるプロジェクトを開始することを、双方の運営委員会で確認した。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

能楽研究所では1名のRAを採用しており、研究活動の他、企画・広報などの業務を実行している。2017年度より情報メディア教育研究センターとの共同プロジェクトが始まった点は、理系教員との協同に繋がることが期待され、優れた取り組みと考えられる。

5 社会連携・社会貢献

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

5.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また教育研究成果等を適切に社会に還元しているか。

①学外組織との連携協力による教育研究の推進に関する取り組み及び社会貢献活動を行っているか。

S A B

(~400字程度まで) ※取り組み概要を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

行っている。2017年10月に実施したシンポジウム「能楽のウェブ発信とその未来」は、今後の学外組織との緊密な連携協力をめざして、国文学研究資料館、立命館大学アート・リサーチセンターの研究者を招聘して行い、その結果として立命館大学アート・リサーチセンターと2018年5月1日付で研究機関間包括学術協定を締結するにいたった。また、2018年2～3月に実施した企画展示は、国立能楽堂で開催される「能の作り物」の関連展示と位置付け、相互に協力して広報を行った。これら研究所主催の様々な企画は、広く一般に公開するほか、その成果を能楽研究叢書として書籍化し、同時に法政大学学術機関リポジトリにもアップして社会への還元積極的に努めている。

【2017年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

立命館大学アート・リサーチセンターとの包括学術協定が締結され、学外組織との連携協力が大きな進展があった。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・立命館大学アート・リサーチセンターと野上記念法政大学能楽研究所との研究協力に係る協定書（写）

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

能楽研究所では、シンポジウム「能楽のウェブ発信とその未来」が実施された。その際、国文学研究資料館、立命館大学アート・リサーチセンターの研究者を招聘し、結果として立命館大学アート・リサーチセンターと研究機関間包括学術協定を締結したことは高く評価できる。また、研究所主催の様々な企画は一般に公開されており、その成果は能楽研究叢書として書籍化され、加えて法政大学学術機関リポジトリでも公開しており、社会貢献活動が積極的に行われている。

6 大学運営・財務

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

6.1 方針に基づき、学長をはじめとする所要の役職を置き、教授会等の組織を設け、これらの権限等を明示しているか。
また、それに基づいた適切な大学運営を行っているか。

① 所長（センター長）をはじめとする所要の職を置き、また運営委員会等の組織を設け、これらの権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。

はい いいえ

(～200字程度まで) ※概要を記入。

所長と専任所員、兼担所員からなる運営委員会の組織を設け、「野上記念法政大学能楽研究所規程」に則った運営を行っている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・「野上記念法政大学能楽研究所規程」

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

能楽研究所では、所長と専任所員、兼担所員からなる運営委員会を設け、規程に則った運営が適切に行われている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

Ⅲ 2018 年度中期・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源である貴重資料の公開や基礎研究を進めるとともに、より広い領域の研究者との協同プロジェクトを展開していく。
	年度目標	貴重資料デジタルアーカイブの充実をはかりつつ、研究成果を研究発表、論文、能楽研究叢書、能楽資料叢書等の形にしていく。 旧来の研究コミュニティとは違う領域に関わる研究協力・研究交流に努める。
	達成指標	デジタルアーカイブに 60 点追加。 能楽研究叢書 1 冊、能楽資料叢書 1 冊を刊行。 新領域に関わるシンポジウム 1 回以上、主催または参加。
No	評価基準	社会貢献・社会連携
2	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源と研究成果を積極的に還元するとともに、能楽界とも連携を強め、能楽の発展と世界への文化発信に寄与するよう努める。
	年度目標	研究成果は各種セミナー、シンポジウム等で公開するほか、国内外の教育機関と連携し、ウェブ上に英語で発信していく。 作品研究・演出研究の成果を能の字幕システム構築事業に提供し、能楽の普及に役立てる。
	達成指標	資料展示、セミナーまたはシンポジウムを 2 回以上開催。学外機関での催しへの学術的協力を 2 回以上。字幕解説 30 曲以上。
<p>【重点目標】 <社会貢献・社会連携> 旧来の研究コミュニティとは違う領域に関わる研究協力・研究交流に努める。 研究所所蔵の資料をできるだけ広く活用してもらえよう学外と共催の展示などを企画していく。 学術的成果が確実に期待できるシンポジウム等とは別に、領域を広げることが目的とするセミナーやシンポジウムを企画する。</p>		

【2018 年度中期・年度目標の大学評価】

能楽研究所の研究活動に関しては、貴重資料のデジタルアーカイブへの追加、書籍の刊行、新領域に関わるシンポジウムへの参加等、中期目標に沿った活動が繰り返されている。社会貢献・社会連携に関しても、セミナー・シンポジウムの開催や学外機関の催しへの学術協力、字幕解説のシステム構築事業など、具体的な活動を精力的に行っており、評価できる。しかし、国外の教育機関との連携は具体的な目標が示されておらず、引き続き取り組んでいただきたい課題である。

【大学評価総評】

能楽研究所は、2017 年度も極めて活発な研究活動を行っており、特に 5 回の一般公開の催しを開催していることは、能楽研究の成果を広く社会に還元する点から高く評価できる。能楽という限られた世界の議論にも拘わらず、外部組織からの論文引用が多いことは特筆すべきことであり、成果の波及効果の高いことがうかがえる。引き続き、法政大学の能楽研究所の存在を国内外に広めてほしい。

2017 年度より情報メディア教育研究センターとの共同プロジェクトを始めたことは優れた取り組みであり、理系教員との協同によるさらなる具体的な成果を期待したい。学外との研究協力体制については、立命館大学アート・リサーチセンターと包括学術協定が結ばれたことは大きな進展であったが、国際的なネットワーク構築については引き続き検討していただきたい。海外の著名な研究者を招待したコロキウムの開催なども、良い機会となり得るだろう。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。